

Creeping Night

黒くて深い森 月は怖くて震えてる

狼は口を押さえ 梟は寝たふり素知らぬふり

おいでおいでと誘う声 いやよいやよと逃げる声

目隠しされたこの闇に 二人は仲良く鬼ごっこ

魔女の食卓はひび割れて 転げ落ちるごちそうさん

ああ こよいは ああ こよいは

どうしてこんなに楽しいの どうしてこんなに恐ろしいの
ひとは誰もいない ばけものしかない

秘密のお遊びは しばらくつづく

それでもおわりはくる おわりが迎えにくる

迷い込んだ妖精は 魔法のたねをもちこんで
首なし馬をいなかせ きょうからつげる

——あらたなおわりを



少女はもてなしを受けていた。

人の往来が久しく途絶えた道を通る幌馬車は、客人を馬車揺れで不快にする事無く目的地に向かっている。音を発しているのは幌にいる二人と馬の歩く音のみで、狼が跋扈する森とは思えないほどに静かであった。

少女の前に紅茶が出される。遥か遠い所から取り寄せたこの香りは、優雅で歴史の深さを感じさせるほどに素晴らしい一品であった。

茶を注いだのは、磨かれた鎧を纏った騎士であった。眉目麗しいその姿は血を流す戦とは程遠く、舞踏会で貴婦人と過ごすのが適当であると思わせるほど華奢でいて色気を感じさせる男性。

「この地で客人を迎えるとは思いませんでしたので」

「気にしないでください。元より転がり込んできた身、これ以上もてなしを受けるとバチ

が当たるでしょう」

少女もこの騎士に劣らずの美貌を持ち合わせていたが、少女の身に纏った服が魅力を半減させていた。寝込みを襲われ逃げてきたのだろうか、ネグリジェ姿で裸足、服も身体も草木で汚れ、柔肌には細かな切り傷が赤く走っている。

髪に留っていた葉を窓から外へ出しながら少女は騎士に話しかけた。

「客人を迎えるとは思わなかった、ね。……そうね、私もまさか好き好んで優雅に馬車でやってくるとは思いませんでした」

「いえいえ、客人は予想外ではありますが、やむごとなき方をお迎えする身であるので、夜分遅くであつてもこうなつてしまうのです。お気分を害しましたか？」

「ここで若し害したと言つて馬車から降ろされたら目にも当てられません」

「婦女子を再び夜の森へ歩かせるなどありませんので、御心配なさらず」

「それは良いことを聞きました。これで首なし馬と楽しく過ごせます」

少女は窓から身を乗り出す。前方に暗闇と同化しそうな程、黒く溶け込んでいる馬がいた。身体が揺れる度に有る筈の首から上部分がない事が分かる。それでもこの馬は呼吸をしている。

窓布を引き、少女は紅茶の続きを楽しむ。

「興味深いものです。完全に幻想へと堕ちずに現世の法則にしがみついています」

「幻想も人もしがみつかなければならない存在です。とりわけ馬の形をしたコレは、現世の馬と同じく人型に飼われ、こうも馬車と成っている。在らざる者にも在るべき形があるのですよ。——それは客人、貴女様も良く御存知の筈です」

騎士は澄ました顔をしているが、少女には彼の本心が見えた。

少女はくすりと笑う。

「そうね、どうやら貴方はお話し好きのようで。……いいでしょう、私が逃げる破目となつた顛末をお話しましょう」

少女は残ったカップの中身を飲み干して、語った。

——少女二人の遊び話を。



私はあとからきた。あのこはさきに城を作っていた。

あのこの城に招待されて、私は連れていかれて。

それからは仲良しごっこ。一緒に食べて、寝て、遊んで。

遊びは色々と。刺激を求めて駒を失くしてもまた遊ぶ。

だから皆はいなくなろうとする。でも城は許さない。

逃げられない。逃れられない。

皆も私も囚われて。私だけがあのこの立場でいられた。

声は次第に減っていくけれど、声は大きくなっていく。

私の気持ちはすり減っていくけれど、遊びは燃えあがっていく。

さあ、歌え。さあ、踊れ。さあ、命を見せなさい。

人それぞれに備わった感情という燃料を。

ありがとう、見せてくれて。さようなら、燃料切れのあなた。

遊び尽くして、二人だけになった時、本当の遊びが始まった。

壊れた城から逃げては追う鬼ごっこ。二人だけの鬼ごっこ。

——そこに貴方が横切った。



少女はここで小休止とばかりに紅茶のおかわりを要求する。騎士は少女のカップに注ぎ、そして自身のカップにも淹れる。

互いに口の中を潤し、カップを置く。小休止の沈黙を破ったのは、聞き手の騎士であつた。

「——成程、既に『城』はなくなっているのですか。これは見当たらない訳です。……私は城を目印にして来たのですから」

「それは悪い事をしました。城があつた場所は綺麗さっぱり無くなっております。つまり、城は『壊れる』ことを許したのです。これまでは児童の範囲内でしたが、今夜からはがらりと変貌していきます。……この場所に、この時間に、『偶々』通り過ぎた貴方こそがその変貌の証左となるのではないのでしょうか」

少女が挑発的な笑みを浮かべると、騎士は困ったように笑った。

「貴女は理解しているようですね。私が——首なし騎士、デュラハンであると」

「首の繋がったデュラハンなんて聞いたこともないですが、現に目の前にいるのです。しかし、目を潰さないのですね」

デュラハンとは、首の無い騎士の姿をした妖精である。デュラハンを見たものは目を潰されるといふ逸話もあるが、少女の言う通り、目を潰されるどころかにこやかに談話までしてしまっている。

「私はまだデュラハンではありませんから。伝承にはないですが、デュラハンとして生まれた時は誰でも首は繋がっているのです。初めて伝承通りの仕事を成し遂げた時に首が外れるのです」

「処女のデュラハンという事ですか。では、意気揚々とお勤めを果たす所に私が通りがかった訳ですか。それは間の悪いことで」

「いいえ、こちらにも有益な情報を得ました。——来たようですね、残念ながら終わりです」

騎士が言葉を言い終えると同時に馬車は大きく揺れ、馬のいななきが響く。
少女は騎士に連れられて夜の森へと繰り出す。

馬車を曳いていた筈の馬は、跡形もなく消えてしまっている。少女が最初に想像した通り、まるで暗闇に溶け込んでしまったかのよう。

馬が消えた先に、もう一人の少女がいた。先の少女と服装は同じだが、一切汚れが見当たらない。

「鬼ごっこも終わってしまったようですね、アンネゲルト」

汚れた服装の少女が名を呼ぶと、もう一人の少女は獰猛な笑みを浮かべて告げた。

「ええ、こんなにも楽しい夜は久しぶりですわ——コルネリア、貴女が初めて城に来たあのお遊び以来かしら」

——コルネリアとアンネゲルトのお遊戯が佳境を迎えた事を。



この地は夜を統べる者——夜王ベーゼンドルファー家の領土である。

他の二門の夜王と違い、他者を取り込んでの混血の夜王。

妖精に取り替えられた——チェンジングの子達に備わりし魔力を吸収する。

島国より海を渡りし子達は、この地の名前を与えられた後、城に幽閉される。

趣向を凝らして血を集め、殺すという感覚を麻痺させる。

他の夜王を黙らせるよう残忍で横暴であれ、ベーゼンドルファーの家訓、戒めである。

城によってこの戒めを外から護り、内からも逃さない鳥籠と化す。

アンネゲルト・ベーゼンドルファーは、三世代続く覇者の血を受け継いだ。

コルネリア・ベーゼンドルファーは、己の血も夜王の血も、そして悪を理解していた。
だからこそ、コルネリアは城の崩壊と共に外へ出たのだ。

——この流れを終わらせる為に。



「夜王になるには残忍さが足りないものであって？ 私と共に培ったあの嗜虐の日々が全然活かされていないわ」

「いいえ、私は誰よりも夜王という責務を理解しています。あの日々は単なる遊びではなく、支配を身につける手段であると」

「ぬるいわ。温室育ちのスタインウェイ家ぐらいに甘ったれた考え。『悪を通せば、悪でなくなる』というのも我がベーゼンドルファーの家訓。人道から外れてこそ、ようやく人外へと辿りつけるのに、その過程が単に支配を身につけるだけの手段だっていうの？」

アンネゲルトはコルネリアを蹴り飛ばしながら嘲笑する。

木に打ちつけられたコルネリアは、満身創痍になりながらもアンネゲルトから目を離さない。

「何、その眼は？ 憐れみ……いいえ、達観しちゃっている眼かしら！ 一体、何が貴女をそうさせているの？」

「——『悪を通せば、悪でなくなる』というのは人外を肯定する言葉ではありません。その意味を履き違えている時点で、運命は既に決まっていますのです。私達はまだ人間なのですから」

「人間ならば、この力は何なのかしら？ 狼や梟も竦ませ、妖精の魔力を絶え間なく吸い続けるこの『拡張血統』^{インベリアル}は人間の力だというの？」

アンネゲルトはコルネリアが寄り掛かっている幹に手を当てる。すると、瑞々しい木はあつという間に萎み、乾燥し、枯れ葉が辺り一面に落ちる。

「人間を超えた力を持っているのが人外でしょ？ 遊びの最中にお説教は興ざめだわ」

「いいえ、人間を超えた力を扱うのも人間である以上、人外ではありません。人間であるからこそ、何故相手が慄くのかという弱い心を理解し、手のひらで踊らせる。これが支配ですよ。……興ざめしてしまったようなので、愉しませましょう。後ろをご覧ください」

「へえ、まあ圧倒的に勝つてもつまらないから、騙された振りして後ろを向いてあげる……誰、あなた？」

アンネゲルトが振りむいた先には一礼した騎士の姿があった。

「お初にお目にかかります。私、美しい貴女にささやかながら贈り物があるのです。受け取ってくださいますよう、お願い申し上げます」

デュラハンは己の剣を首に当て、弦楽器の弓を引くように斬った。

鮮血がアンネゲルトの全身に注がれていく。

「……妖精の血を吸収して私を強くさせようと言うの？」

顔にかかった血を拭ってアンネゲルトは獰猛に笑うが、その笑みの先にはコルネリアの濃い冷笑があった。

「デュラハンが血を流す意味も知らないのですね。……この子にご教授願えますか？」

腰に抱えられたデュラハンの首から、この行為の意味を告げる。

「私達デュラハンの存在意義とは、貴方はこれから死ぬという予言を与える事なのです」



夜が明けようとする中、少女が一人倒れていた。それはアンネゲルトであった。

デュラハンの死の宣告を与えられた以来、不運な事が積み重なり、コルネリアに倒されてしまった。

ぬかるみにはまり、抜けだした後に木の根に躓いて足が折れ、苦し紛れに放った能力が不完全発動になり暴走した魔力で両眼と両腕が破裂したり、動かない両脚を切断されたり。

「……嫌、無様に死にたくない」

「漸く人間らしくなりましたね。さて、先程の悪についてですが、一つの道筋を。その言葉は決して強くなく、それでいて強くあろうとする意味合いが込められています。弱い心には必ず自責による悪が存在します。本当にこれで良かったのか、本当にこれで良いのかという、どこか別に最善の解決方法があると思うからこそ悪があるのです。悪が存在するのは当たり前であり、その悪があるからこそ人は迷い、よりよい道に選べるのです。——アンネゲルト、貴女は悪を許していないのでしょうか？　だから悪という言葉は強者が持ち合わせるべきだと錯覚している」

「……強い者は悪でも道理でも押し通せるのよ！」

「それが誤りなのです。現に貴女は自身の悪を持ち合わせる程強くない。悪は弱いからこそ生まれる事を知りなさい。——何、考える時間は幾らでもあります。妖精の血を深く吸収した貴女なら『妖精郷』に誘われるでしょう。……慰めになるか分かりませんが、私

は貴女が嫌いではありません。怖かったけど、それでも覚えていたい相手でした」

「……残念ね。貴女、今にでも泣きそうな声じゃないの。そんな顔を見れないなんて一生後悔しちゃうでしょうけど……じゃあね、コルネリア」

アンネゲルトの胸元をコルネリアが手で刺し貫く。

「……吸収完了。この能力は相手にも吸収しやすいようにできているからこそ、こうして蟲毒を作るかのように争わせたのですね。ところで、妖精郷は私が勝つように貴方を仕向けたのですか？」

復活した首なし馬がいなくなき、首なし騎士が待っている。

「いいえ、私は告げるだけです。どうするかは私が決めた事です。」

「……そういう事しておきます。では、次は城を作ったあいつを殺しましょう」

少女は馬車に乗り、次の獲物に向かう。その後ろ姿を鮮やかな花で囲まれた少女の墓が見守っていた。